

素粒子奨学会 —2つの素粒子メダル功労賞—

『素粒子論研究』75周年記念エッセイ

小沼通二(慶應義塾大学名誉教授)

1 はじめに

素粒子論グループは、2000年度に素粒子メダル授与を開始した^{1, 2}。素粒子メダルには、このときから素粒子メダルと、素粒子メダル功労賞がある^{脚注1}。このメダル実現への経緯は東島清さんが「素粒子メダル創設の思い」をこの75周年特集に執筆しているのでご覧いただきたい³。

第1の素粒子メダルは、「素粒子論グループが、素粒子論およびその周辺分野で挙げられた顕著な業績を顕彰し、次世代のさらなる独創的研究が生み出されることを目的として、これに貢献した国内の研究者に授与する」と規定され、「毎年1~2件程度」とされている。第22回の2022年度までの受章者は32人である。

第2の素粒子メダル功労賞は、「素粒子論グループが、グループの発展に顕著な貢献をした人に授与する」とされていて、「候補があるときのみ」の授賞になっている。これまでの受賞者は、表1のとおり6人である。

	回次	年度	受賞者	受賞理由
1	1	2000	中村誠太郎	素粒子奨学会の創設と若手研究者の育成
2	4	2003	小沼通二	素粒子奨学会の設立以来の責任者として若手研究者育成に貢献
3	8	2008	山口嘉夫	素粒子論グループ及び我が国の素粒子物理学の国際的な発展への顕著な貢献
4	10	2010	坂東昌子	素粒子論グループ・物理学界の活性化、特に若手および女性研究者育成への貢献
5	11	2011	岩崎洋一	計算素粒子物理学の開拓
6	22	2022	宇川彰	格子QCDの精密科学化と計算科学の環境基盤構築への貢献

表1 素粒子メダル功労賞受賞者と受賞理由^{脚注2}

この表からわかる通り、素粒子メダル功労賞の最初の2件は素粒子奨学会の関係だった。素粒子奨学会について書くためには、まず湯川秀樹のノーベル賞受賞を機に設立された読売湯川
 ***** ***** *****

脚注1: 2006年度には素粒子メダル奨励賞が加わった。

脚注2: 素粒子メダル(素粒子メダルと素粒子メダル功労賞)授賞事業は、2006年度に実施されなかったため、この年を境に回次と年度にずれが生じた。

奨学金について説明する必要がある。

2 読売湯川奨学金

1949年の湯川秀樹(1907~1981)のノーベル賞受賞は、日本全体に大きなよろこびの波を引き起こした。そのなかで読売新聞社の為郷恒淳科学部次長(1914~2003、のち副社長、監査役)が、当時東京大学理学部の助教授だった中村誠太郎(1913~2007)に、「この機に素粒子論学界のために社として何か事業をしたい」といつてきた^{4, 5, 6}。中村が素粒子論分野の人たちに相談して、「苦学している研究者のための奨学金を集めていただけると助かる」と返答した。読売新聞社は快諾して、「読売・湯川奨学基金」として新聞紙面で呼びかけて広く一般からの浄財を集めて、「湯川奨学資金委員会」に譲渡し、ここが運営に当たった⁷。この委員会の委員長は朝永振一郎(1906~1979)、中村はこの委員会の幹事、湯川は名誉顧問だった。応募者は「素粒子論のオリジナルな(既発表か、未発表かを問わない)研究論文を提出し、審査委員会が選考した。第1回交付者は14名で、読売新聞1951年2月19日の紙面で発表された。

その後、集めた募金を基金として運用して利子を配分する方式ではなく、募金自体を配分に宛て、毎年2回募集と交付が1954年まで4年間続けられた。その終了前の1953年に第2次募金活動を行い、1955年6月には財団法人湯川奨学財団を設立した。朝永が理事長、中村は理事だった。第2次交付は1955年から1959年までに9回行った。これで所期の目的の事業は終了した。ところが継続の要望が強かったため、読売新聞社の協力によって研究援助と奨励を目的とした第3次として2回、1960年と61年に共同研究と個人研究に交付した。ここまでの11年の交付総人数は152人に達した。

その後10年ほど後の1972年3月31日に手続きが終わり、財団は正式に解散した。解散に必要な整理と手続きは中村が行った^{脚注3}。

3 素粒子奨学会

素粒子奨学会といわれたときに読者は何を思い浮かべるだろうか。若い人たちはもとより、それ以前の世代のほとんどの人も、毎年発表される中村誠太郎賞ではないだろうか。2023年3月にも、素粒子奨学会は日本物理学会の春の(オンライン)大会のなかで中村誠太郎賞の授賞式を行い、受賞者は記念講演を行った。毎年1度、春か秋の大会で行ってきた行事の第17回で、それまでの受賞者は32人になった。2023年度の募集も始まっている。第1回は2006年度で、秋に授賞者を発表し、2007年3月に授賞式と受賞者による記念講演があった。中村はこの年の1月に93歳で亡くなったので、授賞式に出席することはできなかった。

素粒子奨学会関係の素粒子メダル功労賞受賞は2000年度と2003年度なので、中村誠太郎賞誕生以前のことである。そこで話を前に戻すことにする。1970年だったと思う。私は中村から「読

***** ***** *****

脚注3: 私は、中村から、解散手続きはほかの人の仕事だったが、進まないで中村が行うことになったと聞いた。

売湯川奨学会を解散することになったけれど、大学院を出ても就職が難しい状況がなくなっていない。できれば何とかしたい」といわれた。当時私は基礎物理学研究所にいた。すぐに具体的なアイデアはなかったが、賛成だった。私はその 20 年前に中村が助教授になって初めて講義をしたときの学生である。後期半年の講義だったが、中村が途中で病気になって中断されたまま終わった。しかしその前に、すでによそに書いたように、個人的に朝永に会うという全く予想外の機会をつくってくれた。そして私は朝永の生涯にわたってお近くにいることになったのだった⁸。

中村は河原林研(1932~2003、当時東大駒場)と森田正人(1927~2017、当時大阪大学理学部)にも、同様な話をした。そこで4人で集まって奨学金支給の実現可能性を考えて、民間資金による奨学会を作ることにした。中村は、お金は自分で集めるから、奨学金配分の方式を考えてもらいたいといった。後になって中村は、朝永に話したら、仁科記念財団の募金の妨げになっては困ると言われたと語った⁴。中村は自分の学生時代の多くの友人たちに頼むことにした。中村は(旧制)大阪高等学校に入学したのだが、思想問題によって退学になり、のちに(旧制)第三高等学校に入り直している。当時の高等学校は基本的に寮生活であり、中村の人柄もあって、大学卒業後経済界を含めて各界で活躍している友人が非常に多かった。

相談を重ねた結果、大学院博士課程を修了して、研究を継続しているのに安定した職や日本学術振興会や共同利用研究所などの研究員になっていない人に1年間の奨学金を支給する素粒子奨学会を設立することを決めた。会長は中村。中村を補佐して会を運営するために任期のない委員として我々3人。他に数年で交代する委員若干名。応募には未発表の単独の研究論文の提出を求め、この論文のみによって採用者を選考し、採用されたものは研究交流の促進のため研究場所の変更を求めることにした。

このような経過の結果、素粒子奨学会は、読売湯川奨学会の解散の翌日、1972年4月1日に発足した。それからの1年間に素粒子論グループ事務局報で応募者の募集を行い、各応募者の担当委員を決め、提出論文ごとに外部の1名(必要がある場合2名)を選んで審査を依頼して、独立に委員も担当論文を審査し、選考の委員会を開催した。選考結果は事務局報に公表し、さらに審査委員会の報告と採用者が提出した論文を『素粒子論研究』に発表した⁸。

それによると第1回募集の応募者は37名。選考は午前10時半から夕方6時過ぎまで。相対評価によって上位者を選び、絶対評価を加えて、採用者8名と若干名の補欠者を決定した。この審査方式はその後も踏襲された。

もう一つ触れておきたいのは、奨学金の額である。最初は、日本学術振興会のポスドク研究員と同額にした。それを8人、その中の1人が年度途中で就職して辞退したので翌月から補欠者を繰り上げた。中村の集金能力は余人をもって代えられないものだった。しかも奨学生を受け入れてくれる研究室に、金額は忘れたが、受け入れ者の経費の足しにと研究費を贈ったのだった。

しかし、中村をもってしても資金を必要なだけ集め続けるのは楽な話ではなかった。学振のポスドク経費の上昇についていくことはできなかった。これを示すデータが、1990年の『素粒子論研究』の「素粒子奨学会の18年」のなかに残されている¹⁰。中村の集金額が18年間に半減し、採用でき

た奨学生数も半減している。

資金減少の傾向はその後も続いた。これは中村の友人たちが、企業の中で年と共に影響力を低下させ、引退する人も続くなどというやむを得ない事情によるものだった。個人寄付を頂くこともあった。高木修二（1924—2006）が中心になって素粒子論グループの中で募金活動をしてくれこともあった。私も、中村のお供で企業を訪ねる機会ができ、代理で訪問も重ねた。

それでも限界が近づき、出てきたアイデアが奨学金をやめて、定職についていない若い研究者を表彰し、激励する賞を出すという構想だった。中村は構想には賛成したが、賞の名前を中村誠太郎賞にすることは固く固辞された。話し合いを重ねた結果、承諾してくれて、素粒子奨学生制度は2005年度で中止した。それまで32年間の奨学生総数は150人だった。そしてすでに述べたように、2006年度から中村誠太郎賞が発足したのだった。

これまで見てきたように、素粒子奨学会の事業は功労賞受章者だけによるものではなかった。多くの委員、審査に協力して下さった非常に多くの人たち、募金に応じてくれた企業や個人の理解と支援によるものだった。現在でも、長年尽力されてきた菅本晶夫会長、加藤光裕副会長たちによって活発な活動が続いている¹¹。

4 素粒子メダル選考委員会による業績の説明

最期に、素粒子論グループの素粒子メダル選考委員会が、どのように業績を評価して下さったのか引用して終わることにしたい²。

2000年度

中村誠太郎先生は、1973年(ママ)に読売湯川奨学基金を発展させて素粒子奨学会を設立された。この奨学会の目的は、広い意味での素粒子論、すなわち素粒子理論、原子核理論、宇宙論分野における若手研究者に奨学金を出して、将来の日本のこれらの分野における中堅あるいは指導的な研究者の養成を目指したものである。この奨学金の原資は全て中村先生が会社等を回って集められた浄財によるものであった。

これまでに、総計143名にのぼる若手研究者に奨学金が支給され、既にわが国のこれらの分野における指導者となっている元奨学生も数多くいる。今年度も原子核理論、宇宙線、宇宙物理(ママ、素粒子論(原子核理論、宇宙線、宇宙物理を含む))の研究者1名を公募した。このように、わが国の若手研究者養成の制度が整っていなかった時代に若い研究者を激励し支持してこられた功績は計り知れない。

最近では学術振興会等の奨学金が整備されてきたが、まだ系統的な研究者の養成という意味では、わが国の体制は十分とは言えない。

このような現状にも鑑み、これまでの中村先生の私益を無視した献身的な若手研究者に対する励ましは、学問を志す者全てにとって忘れることのできないものであり、ここに第一回素粒子

メダル功労賞をお送りし(ママ、お贈りし)その功績をたたえることは極めて時宜を得たものである。

なお、中村先生の熱意に共鳴し、素粒子奨学会の事務局長としての役割を長年にわたり務められた小沼通二先生および河原林研先生の貢献もまことに大きなものであったことをここに記す次第である。

2003 年度

素粒子奨学会は、中村誠太郎先生により 1973 年(ママ)に設立され、2003 年度までで延べ 149 名にのぼる若手研究者に奨学金を支給してきた。今年度も素粒子論(原子核理論、宇宙線、宇宙物理を含む)の研究者 1 名を募集した。小沼通二先生は、この奨学会の設立当初から今日まで、一貫してその事務局の責任者として中村誠太郎先生を補佐し、奨学生募集、選考委員の依頼や審査委員会の手配など、奨学会の運営にかかわる事務全般の仕事を引き受けられ、素粒子論グループの若手研究者育成に大きく貢献されてきた^{脚注4}。この奨学金の原資は中村誠太郎先生が民間の篤志家から集められた浄財によるものであり、中村先生無しにはもちろん素粒子奨学会の存在は考えられないが、一方、小沼先生の熱意と事務能力に裏打ちされた全面的支援無しには、素粒子奨学会の事業が今日まで 31 年間の長きにわたって存続することができなかつたこともまた明らかである。また最近では、小沼先生自らが運営委員長として募金活動を引きついでおられる。

近年は、学術振興会の特別研究員の他、21 世紀 COE 研究拠点のポスドクなどが多数採用されるようになってきたが、依然として無給の苦しい生活の中で地道に研究を進めているオーバードクターも数多くいる。素粒子奨学生は、研究場所を自分で選び、書き下ろしの奨学生論文で応募するというユニークなもので、奨学金の額が少ないにもかかわらず、採用された奨学生が受ける精神的励ましは非常に大きなものがある。この素粒子奨学生となって苦しいオーバードクター時代を乗り越えられた人達の中から、幾多の優れた研究者が育つたことを考えるならば、中村先生とともに小沼先生が支えられてきた素粒子奨学会の活動は、大変素晴らしいものであり、素粒子論グループメンバーの研究活動に大きく貢献されてきたと考える。ここに小沼先生に第二回素粒子メダル功労賞をお贈りしその功績をたたえたい。

もちろん、この素粒子奨学会の活動は、中村先生や小沼先生のみならず、常任委員の森田正人先生、河原林研先生をはじめ、多くの素粒子奨学会委員および外部委嘱審査委員の協力によって支えられて来たことは言を待たない。殊に昨年急逝されるまで奨学生審査の実質的責任者として長くご尽力頂いた河原林先生のご貢献はまことに大きなものがあった。このことを

***** ***** *****

脚注 4: この説明と、表 1 に引用した授賞理由の表現の間にはずれがある。こちらが正確。

特に記して我々の謝意を表したい。

参考資料・文献

- 1 [\[sg-l:5562\] 素粒子メダル候補者推薦依頼 \(kyoto-u.ac.jp\)](#) (2023年1月17日閲覧)
- 2 [素粒子メダル 素粒子メダル功労賞 \(kyoto-u.ac.jp\)](#) (2023年1月17日閲覧)
- 3 東島清 「素粒子メダル創設の思い」 素粒子論研究 75周年特集 2023年
- 4 中村誠太郎 『私の歩んだ道』 東海大学出版会、1991年
- 5 中村誠太郎 『湯川秀樹と朝永振一郎』 読売新聞社、1992年
- 6 小沼通二、中澤宣也編集 「追悼 中村誠太郎先生」、素粒子論研究 114巻 6号(2007年3月) pp.49—76
- 7 読売新聞。1950年8月1日(基金募集計画、湯川メッセージ)。8月9日(基金募集開始)。8月21日(募金中間報告)。1951年2月19日(第1回交付者発表、第2回募集、朝永所感)。1959年8月7日(第2次第9回交付者発表、第3次第1回募集)。1961年1月14日(第3次第2回交付者発表)など
- 8 小沼通二 「忘れられないこと」、松井巻之助編『回想の朝永振一郎』 みすず書房、1980年、pp.299—310 など
- 9 素粒子奨学会委員会 「素粒子奨学会 1973年度奨学生の選考を終わって」 素粒子論研究 47巻3号(1973年5月) pp.459—460
- 10 素粒子奨学会 「素粒子奨学会の18年」素粒子論研究 82巻2号(1990年11月) pp.194—195
- 11 素粒子奨学会 <https://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~soryushi.shogakukai/> (2023年2月16日閲覧)